SS 研 2006/7/16

Hannover, B., Birkner, N., & Pöhlmann.(2006)

# Ideal selves and self-esteem in people with independent or interdependent self-construal

European Journal of Social Psychology, 36, 119-133

Rep. 脇本 竜太郎[1]

◇先行研究で，自尊心は理想自己と現実自己の対応の程度によって規定されることが示されている．

➢Moretti & Higgins(1990)

・学生に実際に持っている(と信じている)特性・理想として持っていたい特性を生成させ，その後どの程度それぞれの特性を持っているか，持っていたいかを評定

→理想と現実の乖離が少ないほど，自尊心は高かった．

･･･その後も，自尊心は自己観と個人の目標・理想との比較の結果であるという考え方は多くの研究で支持されている．

◇本研究では，この考え方を独立的自己観を持つ者と相互協調的自己観を持つ者の区別に応用する．つまり，自己観が自己評価をする際の基準あるいは理想を反映しており，そのため，現実自己が自己観に含まれる理想から逸脱する限りにおいて，自尊心は低下すると考える．

◇Hannover らの一連の研究から，今回の問題に関しては．独立的自己観者は協調的自己観者と 2 つの点で異なっていると想定する．

①優勢な内容の違い

＊自律的自己知識　ある個人と他の個人を区別する個人の特性, 態度, 選好に関する自己知識．独立的自己観者で優勢．

＊社会的自己知識　自己がその一部であるような成員性，社会的役割，社会的文脈に関する自己知識は．協調的自己観者で優勢．

②文脈依存性の程度

＊独立的知識　個人を文脈から切り離して記述．Ex. 私は恥ずかしがり屋だ．

＊文脈依存的知識　個人を特定の社会的文脈の一部として記述．

Ex.私はゼミで話すのは苦手だが，友達といる時は面白い冗談を言うことができる．

◇本研究では，独立・協調自己観者の内容・文脈依存性の違いは，対応する理想自己の違いと同じであると考える．

・独立的自己観者：自律的自己知識・文脈独立性を望ましいとする

・協調的自己観者：社会的自己知識・文脈依存性を望ましいとする

[1] 東京大学大学院教育学研究科・日本学術振興会特別研究員 e-mail:wyvern@p.u-tokyo.ac.jp

◇このような予測は，文化的自己の視点(cultural-self perspective; Sedikides et al.,2003)と整合

・それぞれの自己観は，個人が生きる社会的環境においてよき人間となるために満たすべき規範や理想の違いによって生じる.

・独立的自己観を助長するような規範を最もよく満たすのは，自己を独特だと定義し，内的特性を表現・実現し，社会的文脈に拠らず自己の目標達成を図る個人.

・対照的に，強調的自己観を助長するような規範を最もよく満たすのは，社会的文脈の要請に応じて行動を調節する個人.

◇自己観が真に理想を反映しているのであれば，独立性―協調性次元での現実自己を操作することによって，自尊心に影響を与えることが出来るはず.

**OVERVIEW OF THE STUDIES**

・3 つの研究を報告.

・自己観は Singelis(1994)の尺度によって測定

・現実自己の操作は，自己概念の変化に関する研究で用いられた実験パラダイムを使用

➢Fazio et al.(1981)

ある特定の行動を行なわせる(うるさいパーティーのどこが嫌いか／パーティーを盛り上げるために，自分なら何をすると思うかの質問について回答する)

→関連する自己知識(内向性／外向性)が活性化し，その後の自己査定に用いられる.

・研究１，2 では現実自己の内容の，研究 3 では文脈依存性の一致・不一致の影響を検討

・研究１では自己報告の尺度で顕在的自尊心を，研究 2，3 ではネームレター効果で潜在的自尊心を測定.

【予測】

・協調的自己観者は，自律的自己知識や文脈独立的自己知識について考えると，自尊心が低下するであろう

・独立的自己観者は，社会的自己知識や文脈独立的自己知識について考えると，自尊心が低下するであろう

**Study1**

◇被験者ドイツ人大学生 180 名(男性 46 名女性 132 名，不明 2 名，平均年齢 24.3 歳)

◇手続き

・20 名程度の集団で自己観尺度に回答

・１～6 週間後，実験を実施．Trafimow et al.(1991)の方法を用いて，自律的自己知識条件，社会的自己知識条件，統制条件を設定し被験者を無作為配置.

➢自律的自己知識条件：3 分間で家族・友人と自分の異なっている点について書き出す

➢社会的自己知識条件：3 分間で家族・友人と自分の似ている点について書き出す

➢統制条件：3 分間の間，自分の通学路について詳しく書く

・名目上別の研究として，状態的自尊心尺度(Heatherton & Polivy,1991)を実施.

・気分による代替説明を排除するため，28 項目の双極の感情尺度に回答.

◇結果

＊被験者の群分け

・Hannover(2002)に従い，標準化した独立下位尺度得点から標準化した協調下位尺度得点を引き，0 で被験者を分割．結果，独立群 88 名，協調群 85 名となった(2 名は自己観尺度に欠損値があったため分析から除外).

＊自尊心への影響

・自尊心項目の平均点に対して，感情尺度得点を共変量として自己観(独立・協調)×操作(自律・社会・統制)の被験者間の分散分析を行なった.

→共変量は有意 p<.001

→独立群(M=3.77)，協調群(M=3.46) p<.001

→自己観×操作の交互作用が有意(p<.05，図 1 参照)

・パターンは予測どおりだが，単純主効果が有意だったのは，協調群の自律プライム条件(M=3.31)と社会プライム条件(M=3.57)のみ.

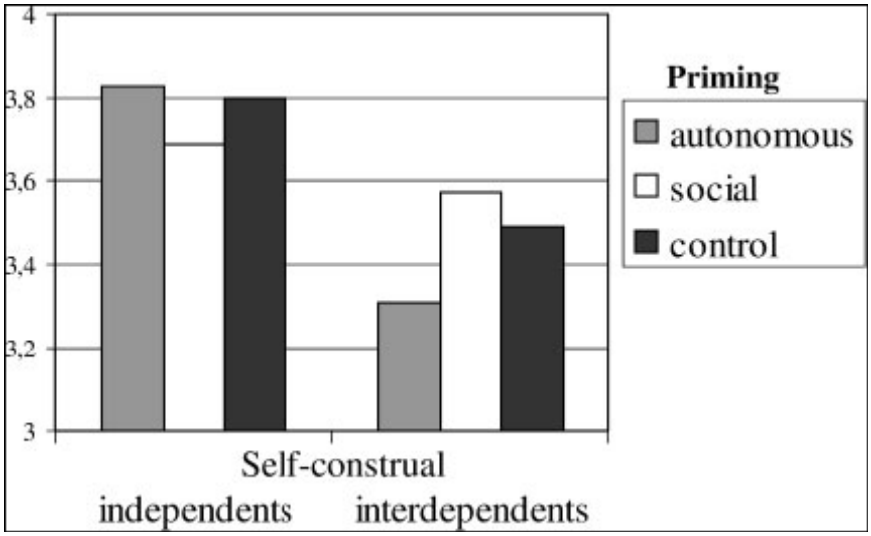


図 1．操作条件ごとの独立群，協調群の状態自尊心得点

・検定力を高めるため，自己観一致プライム群(独立―自律，協調―社会)と自己観不一致プライム群(独立―社会，協調―自立)の得点を統制条件と比較．一変量の分散分析の結果，一致プライム群(M=3.7)と不一致プライム群(M=3.5)に有意差あり．しかし，統制群(M=3.66)は双方と差なし.

◇考察

・予測どおり，自己観と不一致なプライミングを受けた条件で自尊心が低下するという結果が示された．また，この効果は感情の影響を除いた上でも有意であった.

・各プライミング条件と統制条件の値には有意差がなかった.

→しかし，これは予測と一致するもの(2 つのプライミング条件の間にあるのだから)

・・・そのため，「統制条件を設けるのを我慢して(refrained from introducing a control group)」研究 2 では一致プライム・非一致プライム条件を比較する.

・不一致プライムによる自尊心の低下は，顕在自尊心だけでなく，潜在的自尊心でも現れると考えられる．そこで，研究 2 では潜在指標を用いて検討を行なう．潜在指標では顕在指標の場合と異なり，もともとの自己観による自尊心の差は見られないと予測する.

**Study2**

◇被験者　ドイツ人大学生 88 名(男性 21 名，女性 62 名，平均年齢 24..9 歳)

◇手続き

・1 名もしくは 20 名程度のグループで自己観尺度に回答．研究 1 と同じ方法で独立群・協調群に群分け．

・2 週間後に Trafimow らのプライミング課題を実施．

・その後，名目上別の実験として，ネームレター課題を実施．被験者はアルファベットを 1（非常に嫌い）~7（とても好き）で評定．さらに，評定用紙の次のページに全アルファベットのリストがあり，そのこで自分の姓と名両方のイニシャルを〇で囲むよう指示した．

◇結果

＊ネームレター効果の産出

・3 名の被験者は自分のイニシャルに〇をつけるのを忘れたため，分析から除外された．

・各アルファベットにつき，それを自分の名前のイニシャルに含まない人の平均（no-name liking score）を産出

・各個人の姓・名のイニシャルの評定から，上記平均を引く．

・その残差を合計し，それを潜在的自尊心の指標とした（下式参照）．

$$\mathrm{ISC} = \{[x_{\text{first name initial}}\text{-no-name liking(first name initial)}] + [x_{\text{last name initial}}\text{-no-name liking(last name initial)}]\}/2$$

＊潜在的自尊心

・自己観（独立・協調）×プライミング（自律・社会）の分散分析の結果，自己観の主効果は非有意．

・一方，交互作用が有意（p<.05）→表 1 参照

結果のパターンは予測を支持するもの．しかし，単純主効果は全て非有意．唯一，協調群でのプライムの効果が有意傾向（p=.08）．

| | 自律プライム | 社会プライム |
|---|---|---|
| **独立群** | 0.91 (n=18) | 0.42 (n=22) |
| **協調群** | 0.74 (n=23) | 1.51 (n=24) |

**表 1**.自己観・プライム条件ごとのネームレター得点

・実験 1 と同様，自己観一致群と不一致群を作成し，一元配置の分散分析を行なったところ，一致群（M=1.25）が非一致群（M=0.59）よりもネームレター得点が高かった(p＜.05)

◇考察

・予測通り，協調群と独立群で潜在的自尊心に差はなかった．

・また，潜在的自尊心は，(プライミングにより誘導された)現実自己がもとの自己観(理想自己)と異なる時に低下していた．しかし，単純主効果は非有意

→顕在的自尊心と同じパターン･･･不一致プライミングの効果は信頼できるが，小さい．

・実験 1,2 では Trafimow らの課題を用いて，自己観の内容を操作した．しかし，先に述べた通り，

自己観は内容のみならず，その文脈依存性においても異なっていると考えられる．よって，文脈依存性の不一致も，自尊心を低下させると考えられる．研究 3 では文脈依存性の操作が独立的自己観者，協調的自己観者の潜在的自尊心に及ぼす影響を検討する．

**Study3**

◇被験者　ドイツ人大学生 69 名

◇手続き

・自己観尺度に回答.

・3 週間後に，現実自己の文脈依存性の操作を受ける(個別もしくは 15 人程度のグループで実施)

・・・10 個の特性が自己にあてはまるかを回答．但し，選択肢が条件で異なる．

文脈独立条件：特性に関連した選択肢

“typical”，“atypical”，“neither typical nor atypical”

文脈依存条件：状況に関連した選択肢

“is always true of me”“is never true of me”“depends on the situation”

・別の実験と称して，ネームレター課題を実施

◇予測

・独立自己観者は文脈依存条件で文脈独立条件よりも潜在的自尊心が低いであろう

・協調自己観者は文脈独立条件で文脈依存条件よりも潜在的自尊心が低いであろう

◇結果

＊群分け

・研究 1,2 と同じ方法で独立群・協調群に分割.

＊操作チェック

・文脈独立条件では，“typical”，“atypical”の選択が多かった(M=6.3)

・文脈依存条件では，“depends on the situation”の選択が多かった(M=6.1)

→操作は成功

＊潜在的自尊心

・2(自己観)×2(プライム)の分散分析を実施

→研究 2 同様自己観の主効果は非有意

→二要因の交互作用が有意傾向(p=.09)→表 2 参照

但し，また単純主効果は非有意.

| | 文脈独立プライム | 文脈依存プライム |
|---|---|---|
| **独立群** | 1.21 (n=18) | 0.88 (n=22) |
| **協調群** | 0.47 (n=23) | 1.26 (n=24) |

**表 2**.自己観・プライム条件ごとのネームレター得点

・自己観の得点分布の中央 20%の被験者を除くと，交互作用は有意（p<.05）

・研究 1,2 同様自己観一致条件・不一致条件で比較を行なうと，不一致群(M=0.36)で一致群(M=1.23)よりもネームレター得点が低かった，p<.05.

**General Discussion**

◇本研究では自尊心は現実自己と自己観に含まれる理想自己の比較によって生じるという仮説検証のため，3 つの実験を実施した．具体的には，プライミングを用いて優勢な内容(研究 1・2)と文脈依存性(研究 3)の観点から理想と一致／不一致な自己を誘導する条件での，潜在的・顕在的自尊心を比較した．

・予測を支持する交互作用パターンが得られた

→独立的自己観が優勢な者は，自律的自己知識や文脈独立的自己知識について考えた場合，社会的自己知識や文脈依存的自己知識について考えた場合よりも潜在的自尊心が高い

→協調的自己観が優勢な者は，社会的自己知識や文脈依存的自己知識について考えた場合，自律的自己知識や文脈独立的自己知識について考えた場合よりも潜在的自尊心が高い

＊気分の影響を統制しても，このパターンは変化しなかった．

◇先行研究で，自尊心が現実自己と理想自己の内容的一致に依存することは示されている．しかし，研究 3 では，内容は一定で，アクセスの仕方(文脈依存 or 文脈独立)のみが異なっていた

･･･自己観に関する理想成分が，文脈独立性の次元でも異なることを示唆

◇状況による自尊心の変動は主に顕在指標で観測されており，潜在指標は状況に影響されないと想定されてきた．しかし，近年では少数ながら潜在指標の変動が予測されうることを示す知見が報告されている．

➢Hetts et al.(1999)　独立的文化に対する接触の程度で, 自然集団間の潜在的自尊心が予測できることを示す

➢Dijksterhuis(2004)　“I”とポジティブ語が対呈示される試行を行なわせると，潜在的自尊心が高まる

→今回の研究は，理想と現実自己の不一致が潜在的自尊心に概念的に予測される方向で影響を与えることを示すことで上記研究を補完し，潜在的自尊心概念の妥当性を実証するもの．

◇潜在的自尊心と顕在的自尊心の相関は弱いと言われている(Bosson et al.,2000)が，今回は顕在指標の結果（研究 1）を，潜在指標(研究 2)でも再現することができた．

Koole et al.(2001)：潜在的自己評価は，自動的かつ意識的な内省なしに活性化した時のみ，顕在的自己評価と対応する

→顕在的に自尊心を測定することが，潜在指標での測定に影響を及ぼしてしまう

･･･潜在指標と顕在指標の関連に興味がある場合, 同一サンプルで双方を実施するのではなく，それぞれに対する実験操作の効果を独立したサンプルで検討するのがよい．

◇先行研究同様，独立的自己観が優勢な者は協調的自己観が優勢な者よりも顕在的自尊心は高かったが，潜在指標では差が見られなかった．

・潜在的自尊心は理想自己と現実自己の一致の程度を反映

・一方，顕在的自尊心は自己観を再確認する(周囲の他者に，文化的自己観の典型に一致する自己の側面を見せる)ための道具

・・・今回用いた顕在指標は，主に独立的自己観と関連する側面を問うものであった．

Ex. “I feel confident about my abilities.”“I feel unattractive.”

→独立的自己観の強い者は，この顕在尺度に肯定的回答をすることで，理想自己に従うことができる．

➢Pöhlmann et al.(2002)

協調的側面を問う自尊心尺度(coolective self‐esteem scale，Luthanen & Crocker, 1992)では，独立優勢者と協調優勢者で差が見られない．

→この解釈と一貫？

◇本研究の知見は，Leary らの研究(レビューは Leary & Baumeister，2000)と並存可能なもの．

Sociometer 理論：自尊心の低さは，他者からの拒絶の危険性を知らせるシグナルである．

→独立的自己観を助長するような文化では自律的・文脈独立的に振舞う個人が受容され，対照的に協調的自己観を助長するような文化では，他者や社会的状況の要請に応じて行動を変化させる個人が受容される．

・・・その結果，元々優勢な自己観によって，プライムの効果が異なるのだと考えられる．